

私の初夢・・・ 「日本にバウハウスを設立」



お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

町には傷痕軍人、失業者があふれていた。1918年ドイツが思わぬ敗戦をした第一次世界大戦後のベルリンである。時の皇帝ヴィルヘルム2世は同年オランダに亡命し、ドイツ革命と共にドイツ帝国は消滅した。

ヴァイマル共和国が発足したが、ヴェルサイユ条約により、多額で支払い不能な賠償金が突き付けられていた。激しいインフレも起こり、国民の心は疲弊していた。1919年に発足したヴァイマル共和国は国民に再び希望を抱けるように腐心した。その一つが国立の芸術学校を作り、諸外国から一流の芸術家を集めて教育を行うというものであった。首都ベルリンには皇帝はいなくなったが、戦争を主導した軍部と将校、官僚、皇帝の近衛兵、警察組織は残っていた。これに対応する労働者組織との小競り合い、テロも頻発した。

そこで芸術学校は首都ベルリンではなく、ヴァイマル憲法の草案が練られたヴァイマルに作られた。それがバウハウスであり、校長としてヴァルター・グロピウスが迎えられた。グロピウスはアルフェルドのファークス靴型工場¹⁾の実績により、校長に推挙された。

バウハウスの教員として参加したパウル・クレー(Paul Klee, 1879-1940、スイス)、オスカー・シュレンマー(Oskar Schlemmer, 1888-1943、ドイツ)、ヴァシリー・カンディンスキー(Wassili Kandinsky, 1866-1944、ロシア)、ライオネル・ファイニンガー(Lyonel Feininger, 1871-1956、米国)などはこの時代を代表する芸術家である。これに加え、芸術教育に力を入れた教員がいる。ヨハネス・イッテン(Johannes Itten, 1888-1967、スイス)、ヨーゼフ・アルバース(Josef Albers, 1888-1976、ドイツ)、ラスロ・ナホリ＝ナギ(Laszlo Moholy-Nagy, 1895-1946、ハンガリー)等がいた。ヨハネス・イッテンは最初に教育学を学びその後絵画を勉強している。芸術は天性のものと考えられていた時代に、芸術も教育によってある程度の域に達することが可能であるとした。彼らの業績は現在も芸術教育に大きな影響を与えている。

これに加えて初代校長はヴァルター・グロピウス(Walter Gropius, 1883-1969、ドイツ)、3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der



Dessauのバウハウス校舎。グロピウス設計、1925年。



Dessauの教員宿舎(マイスターハウス)。グロピウス設計。この住宅にパウル・クレーとヴァシリー・カンディンスキーと一緒に住んでいた。

Rohe、ドイツ、1886-1969)で、この2名は近代の4大建築家に名を連ねる。こうなると、二代目の校長ハルネス・マイヤー(Hannes Meyer, 1889-1954、スイス)²⁾の影がどうしても薄くなる。しかしハルネス・マイヤーは校長として精密な教育プログラムを作り、自らもベルナウの研修学校など素晴らしい作品を残した建築家である。

第一次世界大戦は1914年に始まり、4年間に及んだ。ドイツ国民の間には厭戦気分が漂っていた。“インターナショナル”という事が言われるようになった。バウハウスは1925年にヴァイマルから Dessau に移転する。そしてバウハウス叢書第1号を発行する。ここに「国際建築、International Architecture」という校長グロピウスの論文が掲載された。これに呼応して日本でも建築

家上野伊三郎を会長に1927年に「日本インターナショナル建築会」が結成された。グロピウスは工業技術の進歩が人類の建築の共通点を広げていくと主張した。

バウハウスでは沢山の女性も学び、女性が手に職を得た。³⁾徐々にナチスが台頭すると、「ドイツ人でも食えない人がいるのに外人教師に高賃金を支払うバウハウスは国民の敵である」として弾圧されるようになった。その結果、バウハウスは1933年に解散し、14年の歴史を閉じた。

グロピウス、ミース・ファン・デル・ローエは米国に亡命し、鉄とガラスの超高層建築を手掛け、それが現在世界の標準となっている。その他工芸品、椅子のデザイン、舞台、絵画、彫刻、芸術の教育法などで、世界に多大な影響を与えた。初代校長グロピウスは個性豊かな芸術家を取りまとめて大変うまく学校経営を行った。グロピウスはシャロテンブルグ工科大学(現在のベルリン工科大学)を出身し第一次世界大戦に出兵している。そして若くして多くの兵士を率い、ここで人心掌握術を学んだようである。ヴァイマールで1923年に、それまでの成果を発表すべく展覧会が開かれた。その一環としてアム・ホルンという場所に実験住宅の建設が行われた。これは後世のプレハブ住宅のモデルとして高く評価された。これはゲオルグ・ムッヘが構想をたて、アドルフ・マイヤーが実施設計を行なっている。ここの子供部屋はアルマ・ブッシャーが設計をしている。それまでドイツ建築の屋根は切妻や寄棟の傾斜があるものが普通であったが、アルマ・ブッシャーはグロピウスに陸屋根の使用を提案している。当時、断熱と防水を同時に行う技術は無く、当然雨漏りが予測された。しかしグロピウスは若き女性建築家の提案を受け入れ、陸屋根を採用した。それ以降バウハウスの建築は陸屋根が採用されるようになった。それまでは屋根は日射熱を遮る日傘と雨をよける雨傘の役割を果たしていた。屋根裏部屋が設けられ、そこで、洗濯物が干された。屋根裏部屋の床で断熱が施されていた。この断熱材は日射や雨水により損傷される事もなかった。グロピウスは「現在では陸屋根は雨漏りが発生する可能性は大いにあるが、防水技術者や断熱技術者が必ず、技術開発を行い、問題を解決する」と考えて、陸屋根の採用に至ったのである。提案者ブッシャーにしても、場合によっては受け付けられないであろう提案を受けてもらい、ますますやる気を出して子供の玩具の開発を行った。

現在ではどうであろう。我が国ではTQCを異常に長い間、行ってきた。これは日本が成長を止めてしまった30年間と一致する。優秀な現場管理者も書類管理に追われる日々を過ごすようになった。失敗のないことが優先し、思い切った技術開発は行われにくくなった。



ヴァイマール アム・ホルンの実験住宅。

さてコロナ禍は一種の戦争である。各国とも多大な財政支出を余儀なくされ、勝利した国はなかった。失業者、倒産する中小企業も増えた。第一次世界大戦後のドイツも同じ状態であった。当時のヴァイマール共和国は世界各国から一流の芸術家を集めてバウハウスを創立した。バウハウスはナチスにより、解散を余儀なくさせられたが、現在でも世界に大きな影響力を残している。そしてドイツはナチスによる汚点を背負うものの、現在では周辺国との関係も良く、尊敬される国として歩んでいる。我が国もコロナ戦争により多大な被害を受けたが新しいバウハウスを創立し、世界から一流の芸術家を集めて、芸術教育を行ってはどうであろうか？ もちろん韓国からも中国からも教員を招く、そして世界から留学生を招く。バウハウスでは優秀な芸術家が共に生活し、お互いに影響を及ぼした。互いに切磋琢磨し、共に成長した。それに学生も加わった。日本が近隣諸国からも尊敬される国になれば、防衛費を現在のGDPの1%の枠を外し2%にする必要もなくなるし、むしろ削減できるはずである。と考えると日本のバウハウス設立は安い投資になるはずである。筆者自体もドイツに留学し学ぶことも多かった。しかしいつまでも外国に留学する時代でもないであろう。日本にもブルーノ・タウトが桂離宮や伊勢神宮、工芸品を激賞したように世界から芸術家や学生を招く魅力のある文化も文化遺産もある。また日本にも世界から注目される建築家は存在する。彼らに日本のグロピウスになって貰い「愛される日本国作り」の手腕を発揮して頂きたい。

(たなか・たつあき 工学博士 URL:www.tatsut.org)

〈参考文献〉

- 1) 田中辰明「世界文化遺産アルフェルトのファークス工場」月刊建築仕上技術2014年2月号
- 2) 田中辰明「バウハウス2代目校長ハンス・マイヤーによるベルリン郊外ベルナウの「同盟研修学校(Bundesschule, Bernau)」月刊建築仕上技術2019年3月号
- 3) 田中辰明「バウハウスと女性たち」婦人之友2020年3月号
- 4) 田中辰明「ハインリッヒ・チレが描いた労働階級のベルリン近代史—ヒトラー出現まで」1巻、2巻アマゾンより電子出版